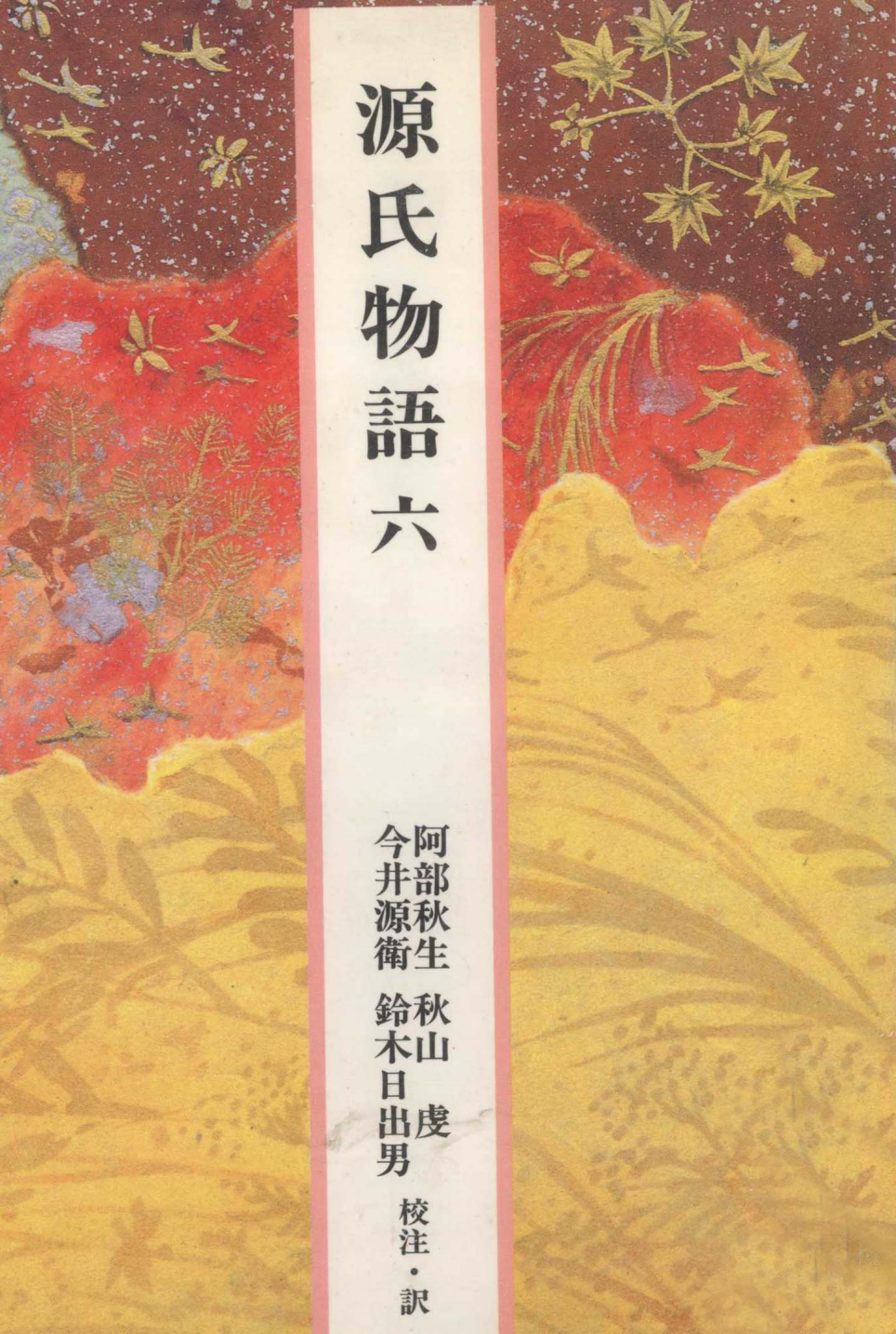




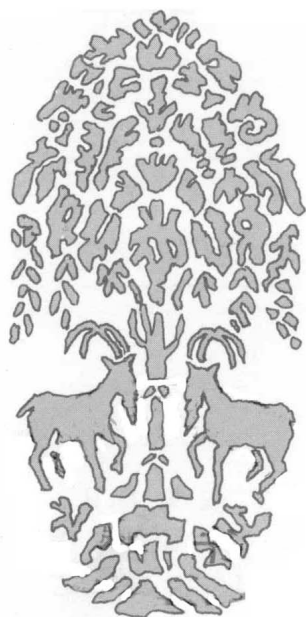
源氏物語六

阿部秋生
今井源衛
秋山 虔
鈴木日出男

校注・訳

阿部

注・訳



小学館

完訳 日本の古典 第十九巻 源氏物語(六)

一九八九年四月一日 初版第二刷発行

校注・訳者 阿部秋生 秋山 虔
今井源衛 鈴木日出男

発行者 相賀徹夫

印刷所 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 小学館

〒100 東京都千代田区一ツ橋二―三―一

振替口座 東京八―二〇〇番

電話 編集(〇三)二三〇一五二四 業務(〇三)
二三〇一五三三三 販売(〇三)二三〇一五七三九

・造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁
などの不良品がありましたらおとりかえいたします。

・本書の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)
することは、法律で認められた場合を除き、著作者およ
び出版者の権利の侵害となります。あらかじめ小社まで
許諾を求めてください。

Printed in Japan

© A. Abe K. Akiyama 1986 (著者検印は省略
G. Imai H. Suzuki いたしました)

ISBN4-09-556019-3

目次

凡例.....三

原文 現代語訳

若菜上.....二一.....三三三

若菜下.....一二.....三〇四

校訂付記.....三八

卷末評論.....三七七

付録

引歌一覧.....三九五

各巻の系図.....四二二

官位相当表.....四一六

図録.....四一八

口絵目次

源氏物語若菜上図色紙	1
源氏物語若菜上図屏風	2
源氏物語若菜下図色紙	4

〈装丁〉

中野
博之

凡 例

一、本書の本文は、伝定家筆本・伝明融筆臨模本・飛鳥井雅康筆本（平安博物館所蔵、通称「大島本」）等を底本とし、これを『源氏物語大成』校異篇所収の青表紙諸本と、その他数種の青表紙諸本とによって校訂したものである。河内本・別本の本文は参考として掲げるにとどめた。

一、第六冊（若菜上・下）の底本としては明融本を用いた。各巻に使用した底本・校訂諸本は、「校訂付記」の巻名の下に略号によって列挙した。

一、本文は、底本をできるだけ忠実に活字化することを期したが、変体仮名を普通の仮名に、仮名づかいを歴史的仮名づかいに改めることをはじめ、次のような操作を加えた。

1 段落を分けて改行し、大きい段落には番号と見出しを加えた。また句読を切り、濁点を加え、会話などを「」でくくり、肩書を付した。

2 宛字は普通の表記に戻し、補助動詞の「たまふ」「はべり」「きこゆ」「たてまつる」などは、仮名書きに統一した。これらのほかにも仮名書きにしたものがある。

大正し↓大床子 だいしょうじ 外尺↓外戚 げさく 五↓碁 ご 木丁↓几帳 ぼんじやう 本上↓本性 ほんじやう せふ正↓撰政 せんしやう あか
月↓暁

思給る↓思ひ（う）たまふ（へ）る 侍なり↓はべなり・はべるなり 也↓なり

猶・尚↓なほ 中↓↓なかなか

3 「／＼」「ゝ」などの繰返し記号は用いず、文字を繰り返して表記した。また、「／＼」「ゝ」を「々」に改めたものもある。

つ↓↓つ つやう／＼やうやう

日↓↓日々 人／＼↓人々 御方／＼↓御方々

4 漢語の韻尾の m・n 音の区別は決定しがたいところもあるので、原則的には n 音（「ん」表記）に統一したが、例外もある。

三位（サンミ） 散位（サンニ） 汗衫（かぎん） 竜胆（りんと）（または「りうたむ」）

5 底本に二通りの表記がある同語は、底本の形にしたがった。

かるしーかろし（軽し） かぞふーかずふ（数ふ） うまるーむまる（生まる） うめーむめ（梅）

まなーまんなーまむな（真字） んーむ（助動詞） なんーなむ（助詞） なめりーなむめりーな

んめり ついしやうーついそう（追従） こきでんーこうきでん（弘徽殿） じようきやうでんー

そきやうでん（承香殿） おほいどのーおほとん（大殿）

一、底本を校訂した部分は、「校訂付記」に掲げ、校訂の拠りどころとした諸本の略号を記した。

一、各帖の本文冒頭にある巻名は、底本の題簽（だいせん）の文字を活字体になおして用いた。

一、脚注については、日本古典文学全集『源氏物語』の注をふまえてもいるが、なお次のような配慮のもとに執筆した。

1 簡潔・明快であることを旨とし、なおかつ脚注だけで十分本文が読解できるように心がけた。

2 本文の見開きごとに注番号を通して付け、その注釈は見開き内に収めるように心がけた。だが、スペースの関係で、時には前のページあるいは後のページの注を参照するよう、↓を付してページと注番号を示した。

3 『源氏物語一〇五』（第一冊～第五冊）を参照すべきことを示す場合は、次のようにした。

↓帚木①四九（本文を参照する場合） ↓紅葉賀②五七（注三（脚注を参照する場合））

↓須磨③④（本文中の太字見出しの章段を参照する場合）

4 語釈は、スペースの許すかぎり、語義・語感・語法・文脈・物語の構成・当時の社会通念などにもふれながら、読解・鑑賞の資となるよう心がけた。

5 段落全体にわたる問題、とくに鑑賞・批評などには、◆を付して記した。

6 引歌がある部分の注は、当該引歌とその歌が収録されている作品および作者とをあげるにとどめ、引歌の現代語訳と解説とは、巻末付録「引歌一覧」に掲げた。

7 登場人物・官職・有職故実については、本文の読解・鑑賞に必要な範囲内にとどめたので、巻末付録の「系図」「官位相当表」「図録」をも併せて参照されたい。

一、現代語訳については、次のような配慮のもとに執筆した。

1 原文に即して訳すことを原則としたが、また独立した現代文としても味わい得るようにつとめた。

2 そのために、必要に応じて、(1)主語・述語の補充、(2)語順の変更、(3)会話・独白（モノローグ）・心内語・引用における「」の添加、(4)文中の言いさしの言葉には下に補いの言葉の付加などの工夫をした。

3 和歌は、全文を引用したのち、その現代語訳を（ ）内に示した。

4 見出しは、本文に付した見出しと同じものを現代語訳の該当箇所に付けた。

5 原文と現代語訳との照合の検索の便をはかり、それぞれ数ページおきの下段に、対応するページ数を示した。

一、卷末評論は、本卷所収の巻々に関連して問題となるテーマを一つとりあげて論じた。

一、卷末付録として、「引歌一覧」「各巻の系図」「官位相当表」「図録」を収めた。

一、本巻の執筆にあたっての分担は、次のとおりである。

1 本文は、阿部秋生が担当した。

2 脚注は、秋山虔と鈴木日出男が執筆した。

3 現代語訳は、秋山虔が執筆した。

4 卷末評論は、今井源衛が執筆した。

5 付録の「引歌一覧」は、鈴木日出男が執筆した。

一、その他

1 口絵の構成・選定・図版解説については田口栄一氏を煩わした。

2 口絵に掲載した『源氏物語図屏風』についてはフリア美術館の、『源氏物語若菜上図色紙』については京都市久保惣記念美術館の、『源氏物語若菜下図色紙』については京都国立博物館の協力を得た。

源
氏
物
語

若^{わか}

菜^な

上

巻名 源氏四十の賀に際して玉鬘が若菜の宴を主催した折の源氏の歌「小松原木のよはひに引かれてや野辺の若菜も年をつむべき」による。

梗概 六条院御幸の後、朱雀院は重く病み、かねてからの本意であった出家を思うが、それにつけて気がかりなのは鍾愛の娘女三の宮の将来である。すでに母女御に先立たれ、有力な後見とてない彼女には、上皇の姫宮にふさわしい高い身分の、しかも温かい愛情で包んでくれる庇護者——婿君が欲しい。候補者選びに苦慮を重ねた末、院の内意は源氏にと固まっていた。

これを辞退するつもり源氏は、亡き藤壺中宮の姪にあたる女三の宮に心動かぬでもなかったが、宮の装束をすませて出家した朱雀院を見舞った際、ついにその後見を承諾した。事態の重大さを悟る紫の上は、内面の動揺を抑えて、冷静に対処しようとするのであった。

年明けて源氏四十歳の正月、賀宴の先頭を切つて玉鬘が若菜を献じた。源氏は玉鬘との過往を思い、感慨も一入である。

二月十日過ぎ、女三の宮は源氏の正妻として六条院に迎え入れられた。源氏は宮の幼稚さに失望し、苦しみに耐えつつ凜然とふるまう紫の上にあためて強い愛着を覚えるが、二人の間に生じた溝は、もはや埋める術もなかった。朱雀院が西山に籠ると、源氏は、紫の上と女三の宮との板挟みの重圧から逃れるかのように、里下がりをしていた臘月夜尚侍に忍んで逢うのであった。

夏ごろから懷妊の兆候のあった明石の女御の里下がりを機に、六条院の円満な秩序を維持すべく、紫の上は自ら申し出て女三の宮と対面した。冬にはいつて、源氏の四十の賀宴が、紫の上・秋好中宮、それに冷泉帝の命をうけた夕霧の主催でそれぞれに行われた。

翌年三月、明石の女御は東宮の男子を無事出産した。遠い明石の地でこの報に接した入道は、年来の宿願の次第を認めた消息を娘に送った後、自らは山深くに跡を絶った。明石の君と尼君は自分たちの人生をつき動かしてきた奇しき運命を思い悲喜交々である。源氏も、入道の手紙を知つて、宿運の不思議さと思うが、一方では、女御の養育に功あった紫の上を称揚して、明石一族の慢心に釘を刺すことも忘れない。明石の君は、源氏の言葉に、卑下忍従の態度を守り続けて来たことの正しさを、今さらながらに確認するのであった。

三月末の陽光うららかな日、六条院で蹴鞠が催された。遊びに加わっていた柏木は、はからずも、夕闇の迫る寝殿の御簾のはずれに女三の宮の立ち姿をかいま見た。紫の上と宮との差を認識する夕霧は、宮の不用意な幼稚さにあきれるが、女三の宮に対する思いを捨てきれずにいた柏木は、わが恋情の報われたしるしかと思ひ乱れるのであった。その夜、柏木は小侍従を介して女三の宮に消息を贈った。

〈源氏三十九歳から四十一歳の春まで〉

わかな上

〔一〕朱雀院出家を志し、
朱雀院の帝、ありし御幸の後、そのころほひより、例なら
女三の宮の前途を憂う

ずなやみわたらせたまふ。もとよりあつしくおはします中
に、このたびはもの心細く思しめされて、朱雀院「年ごろ行ひの本意深きを、后
の宮のおはしましつるほどは、よろづ憚りきこえさせたまひて、今まで思しと
どこほりつるを、なほその方にもよほすにやあらん、世に久しかるまじき心地
なんする」などのたまはせて、さるべき御心まうけどもせさせたまふ。

御子たちは、春宮をおきたてまつりて、女宮たちなむ四ところおはしましけ
る、その中に、藤壺と聞こえしは、先帝の源氏にぞおはしましける、まだ坊と
聞こえさせしとき参りたまひて、高き位にも定まりたまふべかりし人の、とり
たてたる御後見もおはせず、母方もその筋となくものはかなき更衣腹にてももの
したまひければ、御まじらひのほども心細げにて、大后の、尚侍を参らせたまへ

一 六条院御幸。↓藤裏葉〔五〕巻末。
二 もともと病弱〔明石〔三〕八二頁〕。

〔中に〕と、さらに不安が強まる。

三 院の道心は、須磨〔三〕四以来。

四 弘徽殿大后。初音〔四〕六以来

の言及。若菜下二二二頁によれば、

これに至るまでの某年九月に薨去。

これまでの大后の束縛から解かれた院は、自らの判断で出家を決断。

五 語り手の敬意の混入した語法。

六 仏道に心が向くのか。

七 出家のための準備。

八 次三行「亡せたまひに」ま

で、女三の宮の母藤壺女御につい

て語る。人物紹介に常套の文体。

九 桐壺帝の前代の帝の皇女、臣

籍降下して源姓。藤壺や式部卿宮

（紫の上の父）の異腹の妹。醍醐天

皇の承香殿女御（光孝天皇の皇女、

源和子）に准拠、とする説もある。

一〇 「高き位」は、中宮をさす。

二 以下、有力な後見がないため

の、後宮での孤立をいう。桐壺更

衣の孤立とも類似。↓桐壺〔一〕二。

三 藤壺の母方の家系も高貴な血

統でなく、母自身頼りなげな更衣。

三 臘月夜。↓賢木〔二〕一六一頁。

まつりたまひて、かたはらに並ぶ人なくもてなしきこえたまひなどせしほどに、
 気おされて、帝も御心の中にいとほしきものには思ひきこえさせたまひながら、
 おりさせたまひにしかば、かひなく口惜しくて、世の中を恨みたるやうにて亡
 せたまひにし、その御腹の女三の宮を、あまたの御中にすぐれてかなしきもの
 に思ひかしづきこえたまふ。そのほど御年十三四ばかりにおはす。「今は、
 と背き棄て、山籠りしなむ後の世にたちとまりて、誰を頼む蔭にてもものしたま
 はむとすらむ」と、ただこの御事をうしろめたく思し嘆く。

西山なる御寺造りはてて、移ろはせたまはんほどの御いそぎをせさせたまふ
 にそへて、またこの宮の御裳着のことを思しいそがせたまふ。院の内にやむこ
 となく思す御宝物、御調度どもをばさらにもいはず、はかなき遊び物まで、す
 こしゆゑあるかぎりをば、ただこの御方にと渡したてまつらせたまひて、その
 次々をなむ、他御子たちには、御処分どもありける。

〔三〕朱雀院、女三の宮
 春宮は、かかる御なやみにそへて、世を背かせたまふべき
 御心づかひになむ、と聞かせたまひて渡らせたまへり。母

一 朱雀院は臘月夜を寵愛するあまり、この女御をほとんど顧みなかった。↓濤標③「二〇」ハ一行。

二 藤壺女御への憐憫。

三 朱雀帝の退位。↓濤標③「三」。

四 藤壺女御は。

五 歌語。「秋の紅葉と 人々は、おのが散り散り 別れなば」

頼む蔭なく：「古今・雑体 伊勢」。

六 京都西北の仁和寺。仁和四年（八八）建立。光孝天皇御願寺。宇

多天皇も出家後、同寺内に居住。

七 女子の成人式。結婚を前提に十二・四歳に行うのが普通。ここ

でもその結婚問題が俎上にのぼる。

八 財産の処分・分配。承平四年（九三）。

九 出家した朱雀院（宇多天皇）が財産処分したのに准拠したとみる一説もある。

◆物語は、朱雀院の病悩によって新しい局面を拓こうとする。先帝の更衣と藤壺女御の、母娘二代の

哀史をとりこみながら、女三の宮の存在が告げられる。これに執着

する父院はどう処遇するのか。

九 父朱雀院の病悩と出家の決意。

二〇 朱雀院の御所に。

女御も添ひきこえさせたまひて参りたまへり。すぐれたる御おぼえにしもあらざりしかど、宮のかくておはします御宿世の限りなくめでたければ、年ごろの御物語こまやかに聞こえかはさせたまひけり。宮にもよろづのこと、世をたちたまはむ御心づかひなど、聞こえ知らせさせたまふ。御年のほどよりは、いとよくおとなびさせたまひて、御後見どもも、こなたかなた軽々しからぬ仲らひにものしたまへば、いとうしろやすく思ひきこえさせたまふ。

朱雀院「この世に恨み遺ることもはべらず。女宮たちのあまた残りどどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れにも絆なりぬべかりける。さきざき人の上に見聞きしにも、女は心より外に、あはあはしく人におとしめらるる宿世あるなん、いと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならん御世には、さまざまにつけて、御心とどめて思し尋ねよ。その中に、後見などあるは、さる方にも思ひゆづりはべり、三の宮なん、いはけなき齡にて、ただ一人を頼もしきものとならひて、うち棄ててん後の世に漂ひさすらへむこと、いとうしろめたく悲しくはべる」と、御目おし拭ひつつ聞こえ知らせさせたまふ。

- 二 東宮の母女御(承香殿女御)。
- 三 この女御も帝寵を得なかつた。
- 三 東宮が承香殿女御との間に生れて立坊したという宿縁。
- 四 東宮への遺言のような趣。
- 五 東宮は現在十三歳。
- 六 母女御の兄に鬚黒がいるし、女御として源氏の娘明石の姫君がいる。後見に有力権門が控える。
- 七 避けられぬ死別。「老いぬればさらぬ別れのありといへばよいよ見まくほしき君かな」伊勢物語八十四段、「世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそ絆なりけれ」古今・雑下 物部吉名。
- 八 これまで、他人事として。
- 九 わが心のままにならず、頼りないものと人に見下げられる運命。
- 一〇 四人の女宮の、どなたをも。
- 一一 東宮の即位後をさす。
- 一二 四人それぞれの状態に応じて。
- 一三 他の三人には有力な後見があるとて、女三の宮だけを憂慮。その妹宮もいるのに、これを特に「いはけなき齡」とする点に注意。
- 一四 母が亡く、父院だけを頼った。
- 一五 「女は心より外に……」に照応。

女御にも、心うつくしきさまに聞こえつけたまふ。されど、母女御の、人よりはまさりて時めきたまひしに、みないどみかはしたまひしほど、御仲らひどもえうるはしからざりしかば、そのなごりにて、げに、今はわざと憎しなどはなくとも、まことに心とどめて思ひ後見むとまでは思さずもやとぞ推しはからるるかし。

(三) 朱雀院、夕霧に意中をほのめかす

あさゆふ

朝夕にこの御事を思し嘆く。年暮れゆくまに、御なやみ

まことに重くなりまさらせたまひて、御簾の外にも出でさせたまはず。御物の怪にて、時々なやませたまふこともありつれど、いとかくうちはへをやみなきさまにはおはしまさざりつるを、この度はなほ限りなりと思しめしたり。御位を去らせたまひつれど、なほその世に頼みそめたてまつりたまへる人々は、今もなつかしくめでたき御ありさまを、心やりどころに参り仕うまつりたまふ限りは、心を尽くして惜しみきこえたまふ。六条院よりも御とぶらひしばしばあり。みづからも参りたまふべきよし聞こしめして、院はい

- 一 承香殿女御にも、女三の宮を継娘のようにではなく、かわいがつてほしいと折入つて頼む、の意。
- 二 以下、藤壺女御への嫉妬がくすぶるのを、語り手が推測。
- 三 父母もなく後見も薄い女三の宮への、父朱雀院の偏愛ぶりが躍如。
- 三 以下、朱雀院の苦慮。
- 四 物の怪を恐れ、簾中にこもる。
- 五 今度という今度はいよいよ最期かと。病状の重さに死を直覚。
- 六 朱雀帝在位時代に取り立てられた人々。院の外戚右大臣一派に連なる人々である。現今の状況に不満を持つ彼らは、朱雀院を氣晴し所として通っているらしい。
- 七 朱雀院の死が遠からぬと直感。
- 八 女宮処遇を相談できると期待。
- 九 夕霧、源氏の使者として来訪。
- 〇 女房を介さず直接話を交せる。破格なほど親密な扱いである。
- 二 亡き桐壺院が、源氏(この院)と東宮(今の帝)を重んずるべく遺言したこと。↓賢木図一五七頁。
- 三 自分が帝位に即いて。
- 三 帝としての定まった格式に縛られていたので、源氏に親愛の情